



ぼくたちは、バナナ7兄弟。

河合さんちのおばあちゃんにスーパーで買われて、ここへやってきた。

7兄弟といっても、今は1房に6本しかついていない。

長男の太郎に一ちゃんは、ぼくが気づいたときには、すでになくなっていた。どこへ行ったのかは、誰も知らない。

太郎に一ちゃんをよく知る、次郎に一ちゃんはいつも、

「太郎あんちゃんは、伝説のバナナさ。そこらのバナナとは、わけが違うんだ。」と言っている。

なんでも、ぼくたちの生まれ故郷を印した「紋章」を唯一身につけていた偉大なバナナらしい。

ぼくは、房の反対端に残る、太郎に一ちゃんの乾いたもぎ跡を見つめては、太郎に一ちゃんのことを思いだした。

ぼくたちの置かれたテーブルの下では、今日も河合さんちのペットの「バブルス」という名前のチンパンジーが、相も変わらず、ぼくたちを食べようと狙っている。

「やーい、バブルスくーん、食べれるものなら食べてみろー。」  
次郎にーちゃんが、バブルス君をからかっている。

「ウキー」

「食べてみろー 食べてみろー」  
五郎にーちゃんもバブルス君をおちょくっていた。

「うふふ、やめさない。」  
三奈ねーちゃんは、そう言ったものの、この平穏なひと時が嬉しいのかにっこりと微笑んでいた。

ぼくもまたこの平穏さが心地よかった。

！？

「あれ？ 三奈ねーちゃん。何だか背中が少し黒くなってるよ？」

ぼくは偶然そのことに気づき、声をかけた。

「！ しいっ！！ 言っちゃダメ！！！」

三奈ねーちゃんは小声でそう言うと、ぼくの唇にそっと人差し指を当てた。

ぼくは何が何だか分からなかったが、他の兄弟に心配かけさせたくないような素振りを見せる姉に対して、ぼくは続く言葉を発することができなかった。

こくん。

ぼくは無言でうなづく、三奈ねーちゃんは優しい笑みを浮かべた。

他の兄弟は未だバブルス君に夢中だった。それを見た三奈ねーちゃんの安堵の顔がぼくには印象的だった。

学者肌の四郎兄さんはその光景を横目に見ながら、今日も科学や哲学のことについて、ぶつぶつと独り言を言っていた。四郎兄さんは、兄弟一の「物知り博士」でもあった。

ぼくもなかなか「に一ちゃん」とは、呼びにくくて「兄さん」と呼んでいるくらいだ。

流行に敏感な六美ね一ちゃんは、河合さんちのテレビを見て、最新トレンド情報をゲットしていた。六美ね一ちゃんは、渋谷や原宿といった中高生の聖地にいつか自分も行ってみたいと常々言っている。

そんな夏休みのある日、奴がやってきた。

河合さんちのおばあちゃんの孫にあたる、いたずら坊主のカズ君だ。

カズ君のいたずらぶりときたら、バブルスとは比べものにならないくらいひどく、僕らの天敵とも言える存在だ。

「きっ！来たー！！ カズ君だっ！！！」

五郎に一ちゃんは、天敵を確認すると警戒宣言を発令した。

「敵機発見！ 威嚇せよ！ 威嚇せよ！」

するとカズ君は開口一番「おばーちゃん お腹空いたよおー」と叫んだ。

「はいはい。カズ君良く来たね。これでもお食べ」

おばあちゃんはそういうと、僕たちに目を向けた。

その猛禽類の如き鋭い眼光にぼくは背筋が凍りつき、微動だにすることも適わなかった。辛うじて横目で三奈ね一ちゃんの横顔を覗き込んだが、そこには失意の表情しか伺う事ができなかった。

ぼくは直感的に『兄弟が1人減る』ことを理解した。

「クッ！！」

この危機的状況に次郎に一ちゃんが身構える。

「森羅万象 食物連鎖 自然の摂理 運命 (さだめ)として受け入れるもまた  
必然真理か…」

四郎兄さんはブツブツと独り言を言っている。

「くっ 来るなー！！ 俺は美味くないいいー！！！」

五郎に一ちゃんはなりふり構わず叫んだ。

ねーちゃん2人は恐怖のためか、それとも悟ったためか一言も発すること  
はなかった。

そして。。

ぐわっ・・・ぶちっ。

「痛ってえー！！ うわー！！嫌だああー！！！！ 兄さん！！

助けてッ 兄さああん！！！！」

「ごっ 五郎ううう！！！！！！」

「ごーくん！！」

「五郎・・・」

「ちゃーん！！」

「五郎兄ちゃん！！」

五郎に一ちゃんは、おばあちゃんにもぎ取られてしまった。

「はい カズ君。バナナお食べ。」

おばあちゃんはカズ君にバナナを手渡した。

.....

「ぼく、バナナちらい(きらい)！」

ぶんっ！

カズ君は「バナナきらい」という、我々バナナにとって最も屈辱的な言葉を吐きながら五郎に一ちゃんを壁目掛けて思いっきり投げ付けた。

「にっ 兄さあああ————ん！！！！」

「五郎————！！！！」

べちゃ。

そして五郎に一ちゃんは壁に激突して碎け散った。

ゴツン！

「こらっ！ カズ君！！ 食べ物を粗末にしちゃダメでしょ！！！」

カズ君のお母さんはカズ君を叱った。

「…ごめんなさい」

「…そんな。。。 五郎に一ちゃん。。。」

ぼくは目の前の惨事が現実だと理解しつつも、受け入れる事ができなかった。

「ウキキキキ」

そしてバブルス君が木端微塵に碎け散った五郎に一ちゃんを嬉しそうに食べていた。

するとその時玄関で声がした。

「ただいま」

その声は河合さんの長男「洋平」だった。

洋平は、その名の通り傭兵だ。

「まっ、マヴィ！！」次郎に一ちゃんが叫んだ。

「涙を拭う暇もないようですね。」

四郎兄さんは、手に持っていた眼鏡を掛け、体制を整えた。

洋平の過去の経歴については知る由もなかったが、ここ2、3日の立ち振る舞い、おばあちゃんの口コミ情報等を総合的に判断すると、防衛大学に入学するが叶わず、私設部隊の傭兵になった根っからの「武器マニア」であることは間違いなかった。

「い、嫌な予感がする」  
五郎に一ちゃんの殉職で、心なしか体の色彩のトーンが落ち着き目になってきた三奈ね一ちゃんが、ぼつりとつぶやいた。

その刹那！！

「こっ、これは！！」ぼくたちを発見した洋平が一目散に駆け寄ってきた。

ぶちっ、ブチッッッ！！うわぁ————。

「！！ぬう、ぬぬぬぬ、ヌンチャーク！！アタァー！！」

一瞬、自分の目を疑ったが、洋平の両手には紛れもなく、次郎に一ちゃんと四郎に一ちゃんが握りしめられていた。

「これこれ、やめなさい。」

河合さんちのおばあちゃんに注意され、洋平は渋々と、2本のに一ちゃん達をテーブルへと返した。

「にっ、兄さん！！」

ぼくが瀕死のに一ちゃん達に声をかけようとした次の瞬間！！

ぷちっ。

「食らえええー、三節棍（さんせつこーん）！！どりゃー。」

六美ね一ちゃんは、信じがたいことに、次郎に一ちゃんと四郎に一ちゃんに挟まれるような形で、洋平の両手にその身をゆだねていた。

「六、むちゅみねーちゃん！！」

ぼくは、言いしれぬ理不尽さに苛まれながらに、自らの運命を恨んだ。

「いい加減になさい。カズ君も見ているんだから。食べ物は、大事にね。」

おばあちゃんは、先ほどより幾分強めな口調で、しかし、口元に若干の笑みを湛えながら言った。

「今日の演習は、ここまで。」

そういうと、洋平は、に一ちゃん達をテーブルへと戻し、敬礼した。

「だっ、大丈夫！？」ぼくは、恐る恐るに一ちゃん達に尋ねた。

「。。。ぼっ、馬鹿野郎。このくらいでくたばるバナナ様じゃねーよ。」

負けず嫌いの次郎に一ちゃんが、体を震わせながらつぶやいた。

「し、しかし、これで私たちの衰退速度は、着実に速まります。これだけは、避けがたい事実であります。」

四郎に一ちゃんは、淡々と自分達の置かれた状態を述べた。

六美ねーちゃんは、一種のショック状態になり、ぐったりとしていた。

「もっ、もっと房の方へ、元いた場所へ。」

ぼくと三奈ねーちゃんは、できる限り体を寄せた。

「な、何いってやがる。お前も分かってるとは思うが、一度もがれたバナナは、決して房へは戻れねえ。ただな俺達は、何時だって繋がってんだよ。」

「じっ、次郎に一ちゃん。」

ぼくは、次郎に一ちゃん自慢のイエローボディにくっきりと残る洋平の掌の跡を見つめながら号泣した。

三奈ねーちゃんは、涙で溢れるぼくの瞳を優しく拭くと、「強く生きるのよ」と言った。しかしその言葉はぼくを勇気付けるどころか、更なる悲劇を受け入れる事を強要させるようにしか聞こえなかった。

その時だった。

「ちゃんちえつこーん。」

カズ君が洋平の真似事を始めた。

「おっ！ カズ。やるなあ」

自室に戻ろうとする洋平が、カラカラと高笑いしながら言った。

ぼくは「もしや！！」と思い溢れ出していた涙を拭い確認したが、既にそこには、ぼくの近くまで身体を手繰り寄せていた、房を離れた兄弟達の姿はなくなっていた。

「O h h h h h a a a a ~ ~ !!」

カズ君は幼いくせに英語のような奇声を発し、次郎に一ちゃん達をブン回した。

「よっ！上手いぞ、カズ！！ そのまま両手を広げろ！！」

洋平の言葉に従い、カズ君は次郎に一ちゃんと四郎にいさんを握る両手を左右に広げた。

すぼーん。

その刹那、兄達の間挟まっていた六美ねちゃんの身体が空中へ飛び出した。

「うわぁぁー 行かないで！！ むちゅみねーちゃん！！！！」

このまま天井に叩きつけられるのを見ていることしかできない自分に苛立ちを覚えながら、ぼくは叫んだ。

ピタリ。

すると、六美ねちゃんの身体が、突如空中で停止した。

「！？」

ぼくは何が起こったのか分からなかった。  
まさか神などというものが存在し、ぼくたちバナナが受けるこの理不尽な  
殺戮に救いの手を差し伸べたのかとでも言うのか？

事の真相が分からぬまま、ぼくは宙に浮かぶ六美ねーちゃんを見上げた。

「何！？ 何が起こったの？ 何で私浮いてるの？？ いやあああー！！」  
六美ねーちゃんはパニック状態に陥っていた。

「これは・・・まさかっ！？ 糸の結界！！」  
めずらしく四郎にいさんは興奮気味に叫んだ。

「抜け出せ！！ 六美いー！！」  
次郎に一ちゃんも叫んだ。

その刹那！

「斬ッ！！！！！！」

洋平が叫ぶ。

むにゅう。

バラバラバラバラ・・・

糸の結界は、六美ねーちゃんに断末魔の叫びをあげる時間も与えないまま、その身体をスライス状に切り裂いた。

「そんな。。。」

空中をバラバラと落下する六美ねーちゃんの身体を見て、ぼくは目の前が真っ暗になった。

カズ君のお母さんが「これでクレープでも作りましょうか」と言っていたのを、薄れ行く意識の中で聞いたのを最後に、ぼくは意識を失った。

・・・

気を失ってどれくらいの時間が経ったのだろうか？ぼくは目覚めると辺りを見回したが、五郎に一ちゃんと六美ね一ちゃんが近くにいないことを確認すると、昼間の惨事が夢ではなかったのだと再認識した。

すでにカズ君はお母さんと帰ったようで、代わりに食卓には河合さんがいた。河合さんは当然だが、おばあちゃんの息子で、バブルス君を溺愛する油ギッシュなハゲおやじだ。豪快に笑い、しかも結構体臭がキツイ。

ぼくは何もかもが嫌になった。

その時、玄関から微かな声が聞こえた。

「ただいま…」

小さい声ではあったが、確かにそう聞き取れた。間違いない。ヤツだ。

その声は河合さんの次男「祐平」だった。

祐平は、これまでの四半世紀余りの人生で、7度も幽閉された経験を持つ男である。

そのトラウマからか、祐平は 極度の閉所恐怖症である。むろん自分の部屋など持ったこともなく、常に都会の喧噪を求め、さまよい歩いている。

河合さんの家は、幸いにも広めの作りとなっているため、居間までは入ることができるが、風呂とトイレは、屋外で済ませている。

「父さん、僕少し休みます。」祐平はそういうと、居間に入ってすぐの板の上で、スヤスヤと寝息を立て始めた。

「こらこら、またそんなところで横になって。」祐平の母は、台所で夕食の残りをラップにくるみながら、そう言った。

．．．．

「THE CHANCE ☆ ⊆ ∨ ∩ ⊃ であります！！」  
四郎兄さんは、思い詰めたようにつぶやくと、ぼくに自分を台所のあたりまで蹴飛ばしてくれと言った。

「にっ、兄さんを！？ぼくできないよ。」

「隠していたけど、昔、お前の房のあたりが、もっっっのすごく臭くなったことあったろう。」

「うー、それ言わないでよ。みんなに臭い臭いって言われて、大変だったよ。思い出したくもない。」

「あれさー、今だから言うけど、我が輩の仕業だったのだよ。ちょっとした妬みでね。」

「きっ、貴様ああー！！喰らえ、カメムシキークッ！！

Ora、Ora、Ora、Ora、Ora！！」

ひゅー。。。。ぼて。

「あら、こんなところにバナナが。」

母は、床に落ちた四郎を拾い上げ、おもむろに皮を剥き去った後、近くにあったラップで、四郎をくるみ始めた。

「懐かしいから、冷凍バナナにしましょう。」

四郎は、生まれて初めて、皮を剥ぎ取られ高揚していたが、それにもましてずっと考えていた崇高な計画が実現することに歓喜し、震えていた。

「私の死へのカウントダウンは、房からもぎ取られた時点で始まっていた。しかし、しかしだよ、この類い希なる知識と高度なDNAを兼ね備えた我が輩が、こんな歴史の一通加点で種も残さずこの世を去るなんて考えられない。そこで、そこでだ、我が輩は偉大な計画を思いついた。私は、今から冷凍バナナとなり、この素晴らしいDNAを来るべき未来へと繋ぐのだ。さらば兄弟よ。【Cold Sleep☆ミツ】」

「しっ、四郎兄さん。そうか、兄さんはこれを狙ってたんだ。兄さんよ、TOWA（永遠）に。」

・・・翌朝。

「おっ、冷凍バナナがあるじゃん。これはもう、あの実験を再現するしかないでしょう。おい、祐平釘と板持ってこい。」

(ああっ。四郎さん。)

祐平は無言のまま物置から釘と板を持ってきた。

「嗚呼… これ夢だったんだよなあ〜」

河合さんはそういうと、板を床に起き、左手で釘を持ち、板に垂直に立てた。右手には冷凍保存された四郎兄さんを握って。。。

「せーのっ！」

河合さんは四郎兄さんを高く掲げ、猛烈な勢いで振り下ろした。そして四郎兄さんは釘を目掛けて急降下した。

さくっ！

次の瞬間、釘は見事に四郎兄さんのこめかみを突き抜けた。

コールドスリープ状態の四郎兄さんに当然意識はない。自分のこめかみを釘が貫いたことも気付く由がなかった。

「ああ、四郎兄さん。。。」

「あいつ、このまま溶けて意識が戻ったら、、、痛がるんだろうな…」  
いつの間にか隣にいた次郎兄ちゃんが珍しく冷静に私見を述べた。

「ぬぬぬ。。。ダメだダメだああ！！」

思い通りの結末とならなかったことに苛立ちを隠せない河合さんは、その場で地団太を踏み、四郎兄さんを握りつぶそうとした。

「まって、父さん」

祐平はそう言うと、ポケットから缶を取り出した。

「？」

事情を飲み込めない河合さんは、それからの祐平の動作を一部始終見守るしかなかった。

プシュー——！！

祐平は四郎兄さんにスプレーを噴射した。

（ああ。四郎兄さんが。。）

祐平は『瞬間冷却剤』とかかれたスプレーをありったけ四郎兄さんにかけ、兄さんの身体は真っ白になった。

「父さん。はい、軍手」

「お、、おう。」

河合さんは祐平から軍手を手渡されると瞳に光が戻り、再び四郎兄さんを持ち上げた。

「今度こそっ！ ぬん！！」

カーン

そこにはある種心地よい金属音のような音が響き渡った。

「ハハ」 打てた！！ 打てたゾーー！！」

河合さんは信じがたい光景に喜びを隠し切れないといった感じで、何度も何度も四郎兄さんを振りつづけた。

カーーン

カーーン

カーーン

丁度四郎兄さんの腰の部分が、釘を打ち付け、釘は見事に板にささって  
いった。

カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン  
カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン  
カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン  
カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン  
カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン  
カンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカンカン

「打ちすぎだろう・・・」  
すでにぼくの涙は枯れ果てたようだった。

「・・・痛っ」  
河合さんは、狂ったように釘をうち続け、とうとう腱鞘炎のため手首から  
軽く出血してしまった。

「ジェ、ジェエエエー——————ン！！」

河合さんは、油ぎっしゅな手で四郎兄さんを握りしめ冷凍庫へと投げ返した。

四郎兄さんからは、残念ながらはや、ひとひらのオーラ（生体反応）を感じることもできなかったが、彼自身の望みである「DNA」の保存に現時点では成功したようだった。

「やれやれ。」次郎に一ちゃんは、多くを語らなかったが、その背中には、怒りのシュガースポットがくっきりと刻まれていた。

「こんな、恐ろしいところは、一日も早くおさらばだ。」  
次郎に一ちゃんは、何かを決意したようだった。

その夜。。。

「さらばだ、先に旅立つ兄を許してくれ。」

次郎は、兼ねてからの夢を実現するため、カズ君の「mini-4駆」に乗りこんだ。もちろん、呪われた過去と決別するため、黒ずんだ皮をも全て脱ぎ捨てて。。。。

空には、この上なく大きく、蒼白く光る満月が浮かび、旅立ちの時を迎えた次郎を照らしていた。

ピシッ!!

さすがのバブルス君も今夜ばかりは、全てを悟ったのか、これ以上ないほどに反り返りながら敬礼し、次郎の長く伸びた影を見送った。

「ウキ（さらば、餌よ!!）」

翌朝。。。

「じ、次郎に一ちゃんがない。まさか。。。」

そこには、シュガースポットのくっきり残った、次郎のバナナの皮だけが残されていた。

「いえ、大丈夫よ。次郎に一ちゃんは、旅に出たようね。皮に書き置きがあるわ。」三奈ね一ちゃんは、皮の裏側を指さした。

「あ、ほんとだ。」

『・・・オ、レ。タビ、イクマス。サガスシナ、。ジョロウ！！』

(筆：次郎)

こうして、7本いた兄弟は、ぼくと三奈ね一ちゃんだけになった。

「みんながいる時は感じなかったけど、ぼくと三奈ね一ちゃんの間は、こんなに離れてたんだね。手も握ってあげられないよ。。。」

「ううっ、それ、言わないで。。。」

三奈ね一ちゃんは、あの日以来、ずっと泣きっぱなしだ。

三奈ねーちゃんは、その涙のせいで色素が深く沈着し、全身真っ黒になっていた。

「ば、バナナは、食べられてナンボよ。」  
しきりに食べられることを望むようになった三奈ねーちゃんを見ているのは、とてもつらいことだった。

そんなある日、しばらく町内会の慰安旅行に出かけていた、河合家のおじいちゃん衛手吉（93）が帰ってきた。

「ズビシっ、ただいま！！ズビシッ。完全にお茶を所望する。」  
衛手吉は背中を極限まで反らしながら敬礼した。

「ズビシっ！」

そしてその虚ろな瞳をぼく、いや、三奈ねーちゃんに向けた。

「ワシ、黒バナナ、スキ！」

衛手吉はそう言うと右手で敬礼をしたまま、自由の利く左手を三奈ね一ちゃんに伸ばしてきた。人間に【まともに】食べられることしか望まなくなった三奈ね一ちゃんは、延びる衛手吉の手を逆らうことなく受け入れようとした。

「拝受致します」

「みっ、三奈ね一ちゃん！？ そ…そうはさせないっ！」

ぼくは何とか動けないものかと身体を左右に振ってみたが、反り返ったぼくの身体は左右に180度回転するのがやっとだった。

(そして自分の身体が嫌になる)

そして衛手吉はムズと三奈ね一ちゃんをワシ掴みにした。

「ほう。健気なバナナよのう。。。この見事なまでのニグっぶり。涙を流し、息を止め、自ら房からのエネルギー（マナ）供給を断ったとみえる。

差し詰めこっちの小さいバナナのためといったところかのう　なんと兄弟思いな…カカカ。」

ぼくは衛手吉の言葉に驚愕した。

「そんな…　嘘だ！！」

その時バブルス君が話し掛けてきた。

「ウキ（嘘じゃないサル）」

「バっ、バブルス君！！」

ぼくは固唾を飲んで、バブルス君の次の言葉に耳を傾けた。

「ウキ（じゃ）」

「なっ！？」

ぼくは身体が自由が利くようになったら、バブルス君をタコ殴りにすることを決意した。

「本当よ」

その時、衛手吉の手（グー）の中から、か細い三奈ねーちゃんの声が聞こえた。

「良いこと？よく聞きなさい。私はこれから衛手吉さんに食べられます。これはバナナとして生まれてきた我々にとっては最高の名誉なの。私、人生に後悔はないわ。でも最後にもう一度お父さん、お母さんに会いたかった…」

徐々に三奈ねーちゃんの声が聞き取りにくくなる。

「あなたの最後を見届けてあげられなくてごめんね。もし、どうしてもバナナとして食べられるという人生を否定したいのであれば、太郎兄ちゃん（あんちゃん）を探しなさい。そして冒険に出なさい。世界は広いわ。そして海の向こうにいるお父さんお母さんに会いに行くもよし。世界をまわって見聞を広げるのも良いわ。でも最後に。。。して。。。いつまでも元気でね。。。ありが…」

「三奈ねーちゃー——————ん！！！！」

ぼくは三奈ねーちゃんの最後の言葉を待つことができず、無意識のうちに叫んだ。

「お茶が入りましたよ」

その時、おばあちゃんが衛手吉に日本茶を入れてきた。

「むう。カタジケナイっ！」

衛手吉はまたも仰げ反っておばあちゃんにピシッと敬礼をした。

「はいはい」

おばあちゃんは『やれやれまたですか?』といった感じで衛手吉の奇癖(ビザルリー)を受け流した。

すると衛手吉は何やら俯きながらボソボソと独り言を言い始めた。その声はとても小声で、ぼくには聞き取ることができなかった。

(ピンっ! バナナ>お茶)

そして生殺与奪の権を与えられた衛手吉は、気合一閃「シュッ」と叫んだ。

シュッ!

見えなかった。

ぼくは三奈ねーちゃんから片時も目を離さなかったが、衛手吉は一瞬で三奈ねーちゃんの皮を引ん剥いた。

「んっ」

三奈ねーちゃんは最後の言葉を発した。そして衛手吉は喜んだ。

「くっ、臭っせえ—— (/\_\)」

そして衛手吉はあぐりと口を開け、嬉しそうに三奈ねーちゃんをほうばった。

武者武者武者。

三奈ねーちゃんを食べ、お茶をすすった衛手吉は幸せそうな顔つきだった。

「・・・」

ぼくは悲しみを言葉にすることができなかった。

ただ今となっては三奈ねーちゃんが望む形でその生涯を終えられたというのは、むしろ良かったのかもしれない。

ぼくはそう前向きに考えることにした。

でも、ぼくはこのまま食べられて生涯を閉じるということには、やはり納得ができなかった。そして三奈ね一ちゃんのことを思い出して決意した。

「よし。旅に出よう。」

もしかしたら旅先のどこかで太郎兄ちゃんや次郎に一ちゃんと会えるかも知れない。そうしたら三奈ね一ちゃんのことを伝えよう。それが見届けた者の責務だ。

…しかし兄ちゃん達はどうやって移動したのだろう。  
まあ、ぼくの足は確かに兄ちゃん達よりも短い。四郎兄さんを蹴っ飛ばすので精一杯だ。移動なんて出来るはずがない。

「さて、どうしたものか…」  
一人悩んでいると、部屋に洋平が入ってきた。

「おっ、雷帝、居たのか」  
洋平は衛手吉のことを何故かそう呼んでいるらしい。

「むっ。実は旅行先で、ちと気になる情報を入手しての」

「ほう、気になるとは？」

すると衛手吉はおばあちゃんに聞こえないように、洋平の耳元で囁いた。

ごによごによごによ。

「なんと！？すると、あの噂は本当だったのか？」

「左様」

衛手吉はコクリと頷いた。

「もはや、デルタ・フォース作戦を展開しても間に合わぬかも知れんが、  
とりあえず有事に備えよっ！ズビシっ！」

「承知！ズビシっ！」

衛手吉と洋平は互いに敬礼しあった。

ぼくは何を言っているのか分からなかったが、逃げ出すなら今だと判断した。

その時だった。偶然にも軽い地震が起こり、ぼくは台の上から床に転落した。

ひゅー—— もて。

ぼくは乗っていた台と壁の隙間に落っこちた。しかし落ちたときの衝撃は全くなく、なにか柔らかいものの上に落ちたようだった。

「？」

目を凝らしてみると、ぼくは茶色い物体の上に乗っかっていた。

「・・・はて？」

その物体は、ぼくよりもちょうど1周りほど大きく、所々乾涸らび、ミイラ化が進んでいる様子だった。

「あー、なんだか懐かしい匂いがするなあ。」

ぼくは、より強い匂いを求め、その物体を転がしてみた。

「クサッ！！・・・！？」

なんとその薄茶色い物体の胸のあたりには『デルモ○テバナナ（エクアドル）』と書かれた紋章がハッキリと記されていた。そして、その紋章の横あたりには、こう記されていた。

【・・・オ、レ。ハッ、ハマッタ。フカクッ。タァロッ！！】（筆：太郎）

「・・・たっ、太郎あんちゃん！？」

ぼくは、この上ない失望感に覆い尽くされた。

これらの物的証拠が何を示しているのか、頭では分かっているけど、素直に受け入れることができなかった。

「そっ、そんな馬鹿な！！太郎あんちゃんは、『伝説のバナナ』じゃなかったのかよ。何でこんな、テーブルの裏側で乾涸らびてるんだよ。ぼくは、この先どうすればいいんだよ！！」

ぼくは、3000minのウェイトを入れた後、躊躇なく太郎あんちゃんから「紋章」を剥ぎ取った。

ブェリッッッ！！

「ふっ、危うくおセンチに浸るところだったよ。ぼくに分かったことは、太郎あんちゃんは伝説でも何でもなかったってことと、もう後戻りはできないってことだ。」

そうつぶやくと、太郎から剥ぎ取った「紋章」を背中へと装着した。

「蒸着！！これがあたいの十字架なんよ！！」

太郎あんちゃんの骸を踏み台にして進もうとしたその時、あの閉所恐怖症の人が体験するという圧死しそうな緊張感を感じた。

「ふっ、房が、、、」

なんと言うことだろう、かつて兄弟達が微笑ましく集っていた房が、今ではただのつかえ棒となり、狭いテーブルの隙間に挟まっているではないか。

「うっ、うわあ—————。こっ、怖い。動けん。だ、誰かぁ。」

もがけばもがくほど、カラカラに乾いた房は、拘束具のようにテーブルの隙間に嵌り、バナナ7兄弟を嘲笑うかのように、軋んだ音を立てた。

完全なパニック状態に陥り、初めて「死」という物を直面したちょうどその時、テーブルの隙間に細く長く生暖かい物体が入ってきた。

その物体は、房のあたりを器用に持ち上げ、そおーっと明るい空間へと戻り始めた。

「！！」

突然、明るい空間へと連れ出されたぼくは、何が起こったのかしばらく認識できなかったが、そこには河合さんちのペット「オオアリクイ」がいた。

「フシュー（腐臭）。」

「モ、モンデシー君！！く、臭いっ。」

モンデシー君の餌は「金魚の餌」や「キャットフード」で代用していたため、その生暖かいベロからは、凄まじい異臭が立ちこめていた。

ぼくは、モンデシー君のベロ越しに、太郎あんちゃんを見つめた。

「太郎あんちゃんの遺志は、ぼくが引き継いだ。とりあえず、僕たちが生まれた故郷へ行ってみようと思う。」

「モンデシー君、このドライフルーツをあげるから、ぼくをこっそり玄関まで運んでくれ。」

「フシュー（見たんですよ。）」

「おまえは、しゃべれないのかい？」

「フシュー（【最後の風景】という奴を）」

「ほれ、ドライフルーツだぞ。」

そう言うと、オオアリクイのモンデシー君に、ドライフルーツと化した太郎あんちゃんを放り投げた。

「フシュー（お供させていただきます。）」

「よし。同行を許可する！」

「フシュー（頭部に跨って下さい）」

ぼくはおもむろにモンドシー君の頭に跨った。（くっせえ～（/\_＼））

「よーし！ HighDo!!!（ハイドー!!!）」

ダダダダ。

モンドシー君は軽快に玄関目掛けて走り出した。

ダダダダ。

食堂（と呼ぶにはちっぽけだったが）から玄関の方へ直走るモンドシー君は、扉の前で立ち止まると、しゅると自慢の舌を伸ばし、ドアノブに絡み付けた。

「フシュー（よっこいしょ）」

ガチャ

モンデシー君は器用に扉を開けた。そしてまた玄関目掛けて走り出した。扉をくぐると、ぼくのはるか前方に巨大な玄関が見えた。このぼくの小さな身体では玄関まで移動するのに相当の時間を要したことだろう。この特急アリクイに跨っていて本当に助かったと、ぼくは心の中で呟いた。

結構な勢いで玄関が近づいてくる。するとぼくは前方に黒い影があることに気付いた。

「はて？」

たいして疑問すら感じずに直進したが、玄関に近づき、ぼくは衝撃の事実を目の当たりにすることになった。

「ヴァ！ヴァカナ！？」

Vol. 2へ続く